

関西グローバルヘルスの集い

第7回 プライマリヘルスケアへの原点回帰

～アルマアタ宣言を日本語訳しよう～



京都大学医学部医学科5年

吉川 健太郎

2018年WHO本部インターンでアスタナ宣言担当部署に配属
2019年ワシントンD.C政府機関研修プログラムKingfisher Program選抜
周産期女性支援事業Umenokiプロジェクトリーダー



甲南女子大学教授・大阪大学名誉教授

中村 安秀

東京大学医学部卒業。小児科医。インドネシアで国際保健協力の現場を経験し、大阪大学人間科学研究科などを経て現職。2018年より日本WHO協会理事長。

Alma-Ata 宣言とは何か

第二次世界大戦後、アジア・アフリカの多くの国々の独立がなされましたが、こうした多くの独立国で保健医療サービスの公平な供給が重要政策のひとつと位置づけられました。当初は旧宗主国などの先進諸国による病院の建設や、宗教団体によるチャリティーの診療などが行われたため、病院の近くに住民の命を救うことはできましたが、病院から離れた農村部の住民は取り残されており、医療の恩恵に預かれる人々とそうでない人々の間での格差は広がっていきました。

こうした時代背景のもと、先進国と開発途上国が1つになって「すべての人々に健康を！(Health for All)」というゴールを達成するための戦略として取り上げられた理念がプライマリヘルスケアです。1978年9月には、WHOとユニセフによりアルマアタ(旧ソ連；現カザフスタン共和

国)で「プライマリヘルスケアに関する国際会議」が開催され、143か国の政府代表と67の機関(国際機関やボランティア団体を含む)が参加し、会議の最終日にアルマアタ宣言(Alma-Ata Declaration)が採択されました【写真1】。

東西対立が厳しかった当時、西側のアメリカと東側のソ連が同じテーブルに着き、協議を重ね合意に至ることは非常に珍しいことでした。当時は1975年にベトナム戦争が終結し、東西冷戦がいくぶん落ち着いており、デタント(緊張緩和)と呼ばれていました。しかし宣言が採択された翌年の1979年にはソビエト連邦によるアフガニスタン侵攻が行われ、1980年には西側諸国のモスクワオリンピックのボイコットにまで発展しました。このような緊張が高まっている時期であれば、西側諸国と東側諸国が友好的にプライマリヘルスケアについて協議することはできなかったと考えられるため、東西冷戦

の最中の東の間の緊張緩和の時期に、歴史上初めて世界共通の保健医療目標を打ち立てることができたのは、奇跡と言えるかもしれません。

プライマリヘルスケアのこれから

こういった経緯で生まれたプライマリヘルスケアの概念ですが、そのやり方を巡り様々な議論があったのも事実です。1980年代にはいり、マラリア対策や下痢対策といった個別の疾患に特化した「垂直的」な介入と、コミュニティー全体を重視する「水平的」な活動の間で激しい議論がありました。しかし、数値化ができ戦略が明確な垂直的介入はドナー機関等に後押しされてきたものの、実際には末端のフロントラインにいるのはマラリアの専門家ではなく、少数の地域の看護師であり、そうした人々がいくつもの垂直的なプロジェクトを包括的に担当していたのでした【写真2】。

ではプライマリヘルスケアは今後どうなっていくのでしょうか。この概念が過去の遺産とならないためにも、中村先生はプライマリヘルスケアの原点を振り返り、これまでできなかったことを冷静に検証する必要があると指摘します。「ICTやAIを今後どう活用するか」、「人の移動が発達になった今、地域社会がどう自立・自決していくのか」、「民間企業や財団の発言力が増していく中、彼らをどう評価してい



写真1 アルマアタ宣言の様子(wikipedia)

くのか」。激動のこの時代、プライマリヘルスケアもこうした時代の変化に対応していかなければならず、そこでプライマリヘルスケアから高度医療までを担っている日本の地域医療システムからの発信に期待したいという言葉で、中村先生の話提供は終了しました。

宣言文の内容を分かりやすく伝えるためには

プライマリヘルスケア、そしてアルマアタ宣言の時代背景についての話題提供のあと、日本WHO協会が公開するアルマアタ宣言の日本語訳の作成作業を5つの班に分かれて行いました。各班一語一句丁寧に、どの言葉が最も原文が言いたいことを表現できるのだろうかという議論を繰り返していました【写真3】。

しかし参加者が一番悩んでいたのが、医療とゆかりのない人にも日本語版を読んだだけで内容が伝わる言葉選び。中にはプライマリヘルスケアという言葉自体をカタカナではなく日本語で言い換えることはできないだろうかと言っている方もおられました。今回の翻訳のワークショップを通じ、当事者意識を持つことができ、言葉選びの難しさも痛感したという声が多数あり、2020年最初の関西グローバルヘルスの集いは大盛況のうちに終了いたしました。今後にもたくさんの方がグローバルヘルスへの関心を高める場を提供できるよう頑張っていきたいと思っております。



写真2 インドネシアの農村でヘルスボランティアと記念撮影をする中村先生(左から2人目)



写真3 翻訳作業を行う参加者達

関西グローバルヘルスの集いは、関西を中心に、グローバルヘルスに関する諸問題について、あらゆる角度から、自由闊達に議論ができる場の提供を目的に始まりました。参加費は要りません。参加資格もありません。グローバルヘルスに関心のある方は、どなたでもご参加頂けます。2020年度の開催予定日は、5月13日(水)、7月1日(水)、9月2日(水)、11月11日(水)です。すべて時間は18:30～20:30、場所は大阪本町ガーデンシティ 4Fのサラヤメディカルトレーニングセンターです。なお、新型コロナウイルス(COVID-19)の感染状況等によって、中止または延期になる場合がありますのでご留意ください。開催のお知らせは、日本WHO協会NEWSで配信されるとともに、協会のホームページ、Facebookでもご確認いただけます。普段はつながりのない人たちとつながって、真剣、かつ楽しく切磋琢磨しましょう！

本集いに関するお問い合わせ、参加希望の方は、kansai.gh.tsudoi@gmail.comまでお願いします。